

「子育て支援」は誰のため？

— 母親が求める子育て支援はどうあるべきか —

For Whom Childcare Supports?

— *Reconsidering Childcare Support to Meet the Needs of Mothers* —

南 元子 *Motoko Minami*

(人間発達学部)

1 はじめに

最近では、地方公共団体をはじめ大学あるいはNPO組織によって、さまざまな「子育て支援」が行われるようになってきている。子育て中の保護者を対象にしたワークショップや教室のほか、色々な形で子育てを支援する施設が充実するようになって久しい。個々の子育て支援事業には、それぞれの設立の趣旨があり、目的や対象も千差万別であって、これらをひとまとめに論じることは難しい。そこで本論では、筆者がセンター長を務める子どもコミュニティーセンターで実施している「にこにこワークショップ」に参加している保護者を対象にアンケートを取った結果を基に、本学の子どもコミュニティーセンターがどのような保護者を対象にして、またどのような子育て支援を心にかけているのかを明らかにしながら、現在子育て中の保護者——特に母親——が期待する子育て支援の在り方について考察をする。

子育て支援が対象とする保護者とは誰なのか、ということ論を論じるきっかけになったのは、ある子育て支援ボランティアの方から何気なく発せられた「このような大学の子育て支援事業に参加する母親は、大した悩みもなく、このような支援事業に大きな意味はないのではないか」という問いかけにある。「支援」という言葉が「支援する側とされる側との間に暗黙裡に想定される力関係・上下関係」を想起させてしまい、「支援する側は、困っている人を助ける」という関係を前提に子育て支援を考えてしまうことが多く、「大して困っていない人は支援の必要がない」という誤解が、「支援をする側」にみられることは残念なことである。これは子育てを終えた世代が、「何も知らない(!)」若い世代に自分の子育ての経験を基に助けてあげるという構図が、せつかくの子育て支援教室から若い子育て世代を遠ざける結果になっている事例にも関係する。

子育て支援は誰のためのモノか？ 子育て支援を受ける保護者は、悩みを抱えていなくてはいけぬのか？ 当然答えはNOである。「子育て支援」は大きな悩みを抱えた保護者(多くの場合は母親)だけを対象として行うものではない。悩みを抱えた保護者の支援が必要なのは言うまでもないが、子育てについて何の悩みもないように思える保護者、あるいは実際に何も悩んでいない保護者をも巻き込んだ、子育て支援というものも必要な

ではないか。それは子育て世代を中心にした、子育て中の保護者が主役になって、子育てをきっかけに楽しい時間を共有できる場や機会を提供する必要性と意義を、「子育て支援」に係る人間の一人として考えることが今こそ必要なのではないか、と言い換えてもよい。

本論では、「子育て支援」という名称では掬えきれない、「子育てを楽しむ緩やかなコミュニティやネットワーク」の構築の必要性を提案するための基盤として、子育て中の保護者が期待する（あるいは楽しみにできる）子育て支援の在り方について考察をする。

2 名古屋芸術大学「子どもコミュニティセンター」と子育て支援の概要

名古屋芸術大学では、平成21年度から地域貢献事業の一環として、0～3歳までの未就園児の子どもと保護者を対象に、子育て支援事業（通称「にこにこワークショップ」）を開いている。にこにこワークショップは、大学の授業期間の開催を原則としているため、5月～7月に21回、10月～1月に21回の1年間に42回、水・木曜日の午前10～12時に、自由遊び（1時間30分）とテーマ遊び（30分程度）を組み合わせた保育内容で行っている。保育室は、独立した建物ではなく、正門横の校舎の1階に設置した子育て支援室を中心としてベビーカーや自転車の駐輪所も併設している。自家用車で来る利用者には、学生用の駐車場も開放している。また学生食堂の利用も可能なので、12時に保育が終わると、多くの親子連れが学内の食堂へ行ったり、中庭のベンチや芝生広場などで、学生たちに交じって昼食をとっている。

子どもコミュニティセンターの指導員は、保育士または幼稚園教諭の資格・免許保有者3人で、通常の保育は2人体制で行っている。また事務員1人も保育時間中に入り、書類整理や環境整備、保育の補助を行う。さらに学生ボランティアが、ボランティアスタッフとして登録したうえで、授業の空き時間を利用して参加したり、保育外の時間では、玩具の消毒や破れた絵本の修理などを手伝っている。子育て支援の場に多くの学生が参加する事も、大学で行われる特徴の一つである。なお、利用者の親子は保険（リクエーション損害補償）に加入することになっているのだが、その代金はセンターで負担しているので、「にこにこワークショップ」は無料で利用できる仕組みになっている。

3 利用者のインタビューとその分析

今回の調査は、母親の求める子育て支援の在り方を検討するために、保育中の自由遊びの時に8人の利用者以下に以下の5つの項目について、個別にインタビューをして答えてもらう形で行った。質問内容は以下の通りである。

質問

- ① なぜ大学の「にこにこワークショップ」に来ようと思いましたか。来ようと思ったきっかけは何ですか？
- ② 育児で困っている事や、ストレスの原因は何ですか？

- ③ 子育ては「ワンオペ」と世間では言われているが、あなたの場合はどうですか？
- ④ 世間で騒がれている「イクメン」という言葉についてどう思いますか。実際のところ現実はどうですか。
- ⑤ あなたにとって「理想の子育て支援」の形は何ですか。

インタビューの結果とその分析は以下のとおりである。

質問① どうして大学の「にこにこワークショップ」に来ようと思ったのか。そのきっかけは何ですか？

8人中6人の母親にとって、大学の子育て支援に参加しようと思ったきっかけは、地域の情報誌『北名古屋タイムズ』や、保育園や市の子育て支援センターに貼ってあったチラシを見て知ったようで、近所の人に教えてもらった人は2人だった。子どもが生まればかりの赤ちゃんの頃は、母親にとってもまだ知り合いは少ないので、近所の人に教えてもらうことよりも、公共の施設に貼られるチラシや地域のコミュニティ新聞を見てくる人が多いことが分かる。

「にこにこワークショップ」を利用するようになった理由は、インタビューを受けた8人の母親すべてが、家で子どもと二人っきり（もしくは三人っきり）で、母子ともに退屈してストレスが溜まることを理由にあげている。「家からでるために、今日はどこへ出かけるか？」を考えることが毎日の日課となり、児童館や園庭開放などの予定表を毎日確認して出かけている、と答えた母親もいた。

また本学の「にこにこワークショップ」は、大学主催で会場も大学敷地内にあることから、児童館や子育てセンターと比べて敷居が高く感じられ参加するのに躊躇したと答えた人がいたのも注目すべき点である。自分の育児に不安を感じている母親にとっては、常に正解を求めるように思われがちな学校的なものに対して不安を感じやすいのかも知れないことが分かる。

本学の活動の良い点としてあげられたものに、児童館などでの子育て支援での活動は、曜日によって参加するメンバーが決められ固定されているけれども、大学は自由参加なのでメンバーに縛られないのが気が楽であるという答えもあった。母親たちにとって、未就園の子育て仲間や子どもの友達を作ることにするストレスはとても高い。友達を作るために自ら積極的に働きかけながらも、一旦仲間を作りそのコミュニティに入ってしまうと、今度は仲間外れにされないように気を使い、その関係に疲れてしまうこともある。母親たちは孤独感から子育て仲間であるママ友を求める一方で、関係に縛られない自由なつながりを求めていることも分かる。子育て支援に関わる者は、母親たちの人間関係をどのように把握し、居心地の良い人間関係が維持できるようにするにはどのように支えていくべきなのかについても、子育て支援事業の一部として考えないといけない。

全般的にいえることだが、ボランティアの大学生が我が子と向き合っていて遊んでくれてい

る姿を見ると、とても嬉しいと感じる親が多いようである。これは、多くの場合、自分の子どもが初対面の大学生とも楽しく遊ぶ姿に、子どもの成長をみているのであろう。学生にとっては、母親と接することは緊張することのようであるが、将来保育者になる学生にとっては保護者の考え方や気持ちを知る良い機会となるだろう。

質問② 育児で困っている事、ストレスの原因は何ですか？

多くの母親が挙げたのは、「育児中は誰とも話さない昼間を過ごすので、大人と話したい」という欲求であった。中には、帰宅した夫からも「家にいる時ぐらい1人で静かにさせてほしい」と言われて、一日中会話が出来ない辛さを訴える人もいた。

また家では退屈なので子育て支援センターに通う一方で、保育中に集団行動ができない我が子の姿を見ると腹が立ってしまい、「いい子にお座りができたらママはお菓子を買ってあげると言ったのに、なぜできなかったのか」と帰宅後に3歳の子どもに叱責し、後からそのことを後悔することを嘆く母親もいた。集団行動になじめない我が子を他の子と比べて焦る気持ちは、集団に入ればより強くなるだろうし、そうかといって子どもとふたりっきりで家で過ごすことも難しく、母親たちの焦りは、子どもと一緒にいる時間が長ければ長いほど増すようである。

育児で感じる苦しさは、育児そのものよりも、育児の現実と、思い描いていた理想とのギャップにあるという母親もいた。それは、子どもが思ったように育たないという子どもに対する期待と現実のギャップだけでなく、自分が幼いころに母親からしてもらっていたような事が、自分には簡単に出来ないという、母親としての自分の姿が理想とは違うから苦しいというものであった。

周りの目がストレスだと答える母親もいて、親せきや近所の人たちから悪意なく「二人目はまだなの？」「母乳なの、ミルクなの？」と聞かれる一つ一つが、あなたの育児はもっとこうあるべきだと押し付けられているようで窮屈に感じる人もいた。子育てに関わるストレスが、子どもとの関係以上に、実は周囲の目の複雑な関係によるところが少なくないという現実が、こういった回答からも想像できる。

質問③ 子育ては「ワンオペ」と言うけれど、あなたの場合はどうですか？

この問いに対しては、実家の敷地内に家を建てて住んでいる人と、自営業のために夫がいつも家にいる2人以外の6人全員が、ワンオペレーションで育児をしている状態だった。

育児休業中で家にいる保育士も、家での子育てがこんなに大変だとは思ってもいなくて泣きそうになる日々であると語った。またある母親は、平日のワンオペ状態では、スマートフォンを触る時間すら1分もないほどの忙しさであるとし、少しでもいいから自分の時間が持てるようになりたいと答えた。他の母親は、子どもの些細なことでパニックに陥った

日に、泣きながら隣人に助けを求め、隣の人がしばらく子どもを預かってくれて、ようやく自分一人の落ち着いた時間をつくることができ救われたという話をしてくれた。この話からは、近所とのつながりが孤独な母親の辛い育児を救うかもしれないことがうかがわれる。休日に夫が家にいる時も、夫は育児に参加するものの、あくまで「お手伝い」であって主体的な関わりは期待できないので、結局すべてを決めて指示をするのは母親である自分で、平日も休日も子育てにおけるすべての責任は母親にかかっていることを嘆く母親もいた。

6人の母親が話してくれるエピソードからはどれも、これ以上耐えられないと感じる状態におかれながらも、1人育児に奮闘している母親たちの姿が見えてくる。ここで子育て支援に関わる人間が肝に銘じておくべきは、悩みや辛さの感じ方は千差万別であり、たとえ一見したところ取るに足らない悩みだと思える場合であっても、「自分ならば」といった自分を基準に考えることを厳に慎むということである。子育て経験のある子育てボランティアに熱心な熟年世代のサポーターの何気ない一言が、たとえ悩んでいないように見えても、子育て中の母親の心を深く傷つけることが珍しくないことを、改めて確認した思いであった。それぞれの保護者の置かれた状況を知っていても、まずはしっかりと保護者の思いに傾聴することの重要性をここでも再認識できるだろう。

質問④ 世間で騒がれている「イクメン」についてどう思いますか。現実はどうですか。

これは、母親たちはそれぞれ思う事が沢山あってか話題が尽きない質問であったようだ。一番多く挙げられた内容は、育児は夫婦で共同で行うべきであると思いつつながら、しかし現実的には母親がすべてを担っており、父親が積極的に育児に参加しない現実への不満や嘆きが圧倒的であった。

本当はやってほしいことが沢山あるが、期待値が上がるとがっかりすることも多くなることと、子育ても大事だが夫婦関係を保つことも大事なので、そこは見ても見ぬふりをしていて、という母親もいた。周りで聞いていた母親たちも、「夫に期待しない」「あきらめの境地」について「そうだそうだ」と賛同した。そして彼女たちが口をそろえて言うことには「自分たちは専業主婦で養ってもらっているから、夫に対して多くのことは言えない。仕方ない」であった。

一方で、仕事を持っている母親はどうだろうか。現在育児休業中の母親は、それまでは結婚して共働きでありながらも家事全般を引き受けていたが、妊娠を機に家事の分担を提案し、大騒動になったということを知ってくれた。現在も家事分担についての話し合いは揉める事柄であるけれど、妊娠中も現在も、自分には仕事があって収入があるために、分かり合えない夫と仮に離婚しても大丈夫だという安心感があるので、対等に話し合うことが出来る、ということだった。経済力があっていつでも離婚できる妻は、対等に夫と話し合っ家庭生活を築いていくことがしやすいのかもしれない。収入がなく今は離婚でき

ない妻は、夫と対等な関係を求めることを言い出せないまま、あきらめているようだ。

「イクメン」という言葉が世間で騒がれる中、父親が少し育児をすれば必要以上に褒められる状況に母親たちはいら立ちを感じ、せつかく「あきらめの境地」に立ったとしても、近所の家庭で子育てに積極的に取り組む父親がいると羨ましく思い、心穏やかにいられなくなるようだ。核家族で女性一人が子育てを担うのは限界があり、「父親として子育てに関わるのは当然だ」という意識も高まっており、男性による家庭生活と職業生活の両立は今後の課題である。そして、このような現状に子育て支援はどのような形で介入できるのか、あるいはできないのか、ということも今後子育て支援に関わる人間は考えていかなくてはならないだろう。

質問⑤ あなたにとって「理想の子育て支援」の形は何ですか。

多くの母親にとって理想の子育て支援は、まず「行く場所があること」であった。名古屋芸術大学の子育て支援教室は、水曜日と木曜日だけなので、土曜日も含めて回数を多く開いてほしいという要望も出た。土曜日に開設を望む理由は、夫に子どもが遊んでいる普段の姿を見てもらい、夫と一緒に子どもの育ちを共有したい思いからであった。妻一人だけでなく夫と共に、我が子を育てたいという気持ちがあることが分かる。一度、地元のケーブルテレビが保育を取材に来たことがあり、その時の放映を録画したDVDを貸し出したところ評判がよく、夫と一緒に見たという声があがった。「夫婦での子育て」と大上段に構えるのではなく、子どもの遊ぶ姿を少し離れたところから夫婦で見ると、ということは夫婦が子どもの成長を実感しながら共有できる機会になるだろう。質問④の際に母親からでた不満を軽減するために、このような土曜日の子育て支援を検討すべきなのかもしれない。

名古屋芸術大学の子育て支援は、2時間の保育時間のうち、90分が自由遊びで30分をテーマを決めた設定保育をする形態をとっているのであるが、30分間の集団保育があることが、就園前の保育にありがたいという声が全員の母親よりでた。育児中は我が子が正常に育っているのが不安なので、保育士の指導の下に集団遊びができるのは、自分の子どもにきちんとしつけができていような安心感を持つことができ嬉しいということであった。母親たちのインタビューから分かる事は、幼稚園や保育園に入園する前に、少しでも集団になじめる子どもに育てておきたいことが、子育ての重要な課題となっていることがよく分かる。母親とのインタビューでは、それまで母親の膝に入って他の友達が遊ぶところを外から見ていた我が子が、すーっと集団の輪に入っていった時、とても嬉しく胸が熱くなったというエピソードを語った人もいた。今回のインタビューとは別にセンター長である筆者が、利用者を対象に育児に関する講座を開いた際に、育児に対する将来の不安をたずねたときも、①子どもが学校に入学してからいじめられないか、②不登校にならないか、が大きな心配事としてあげられた。我が子が集団生活に適応しながら成長してい

くことが、母親たちの強い願いであることが伝わってきた。

また多くの母親たちは、保育時間に学生が入って、学生が我が子と一対一で向き合っていて遊んでくれる姿を見ることが、とても嬉しい時間であるとも答えていた。園長経験者であるベテラン保育士、子育て経験はないが保育を学んでいる学生たち、保護者と未就園の子どもたち、とさまざまな層の人たちが交わることのできるのも、大学の子育て支援の活動の特徴であるということが出来る。

この背景には、子育て経験のない学生に対して、子育て支援を受ける母親が教える機会があるということも見逃せないだろう。「支援を受ける」側の母親は、どうしても自分が支援スタッフに助けをもらう下の立場、あるいは教えを乞う立場にあると思いがちであり、実際そのような印象を持つこともあるのかもしれない。しかし、保育を学ぶ学生たちは、母親の話から学ぶことが多く、子育て支援の場に参加する母親が教える立場にもあることを実感できる瞬間がそこにはある。「支援」という言葉が暗黙の裡に設定してしまう微妙な上下関係を解消する契機は、子育て経験のない若くて未熟な学生について、子育てにかかわる個人的な体験談を母親がするというところに見いだせるのかもしれない。

4 まとめ及び、母親の求める理想的な子育て支援の在り方を求めて

一般に多くの子育て中の母親たちは、地域とのつながりが出来ていない状態で初めての育児がスタートし、子どもが言葉を話すようになり歩き出すころになると「他の子は〇〇ができるのに、うちの子はできない」「うちの子は普通に育てているのか」など、子どもの発達について不安を抱くという。そして子育て支援教室などを通して、子どもが少しずつ集団生活の場を経験するようになると、「落ち着きがなく動き回って先生の話が聞けない」「引っ込み思案で、お友達と遊べない」など子どもの行動や情緒の問題に悩むことが増える。乳幼児を育てる親は、自分の子どもの発達に遅れがないか、集団生活になじめるかなどの不安を抱えやすい。子どもの発達とともに不安を抱える内容も変化していくので、子育て支援に携わるスタッフは、それぞれの抱える問題が深刻化しないように親たちを支援していく必要がある、ということになっている。

しかし、今回のインタビューでは、子育ての悩みと同時に、子育て中の母親の悩みやストレスに注目して調査を行った。それは、従来「子育て支援」の果たす役割とされていることが、必ずしも子育て中の母親の思いや希望と一致していないケースが散見されるからであった。子育てに関する悩みについてではなく、子育てに携わる親が感じている悩みやストレスが、必ずしも子育てに直接かかわらないことにも大きく関係していることを明らかにすることが本論の趣旨であった。「子育て支援」を提供する側の思いと母親が望む子育て支援との間の齟齬は、子育て支援に関わる人間すべてが日々感じていることであるが、それがどこにあり、どのような解決策があるのかについて明確な答えを与えることは難しい。しかしながら、今回のインタビューからわかるように、子育てに関する情報が

あふれる現在、子育てをする保護者——多くの場合は母親——の日常感じている悩みや不安のありかを見直すことで、子育て支援の在り方自体を見直すことにつながるのではないだろうか。それは、いわゆる「ママ友」同志の人間関係が子育て以上にストレスの原因になる可能性から、自由に話ができる縛りの少ない緩やかなサポート関係を求めつつも、その機会がないこと。自分の子育てに対して評価するのではなく、むしろ興味をもって耳を傾ける学生との対話がストレスの軽減や日頃行っている育児への自信につながることをあげることができるだろう。あるいは、専業主婦たちが夫に遠慮をしながら、夫にも育児の理解や参加を求めることを半ばあきらめている現状から分かるように、夫婦でコミュニケーションをとって育児が出来るきっかけを提供することも、大切な課題であろう。

今回のインタビューで明らかになったことは、「子育て支援」における保護者（母親）と支援者との対等な関係の構築の必要性であり、たまに会う母親同志で嫌な時は参加しなくてもよい緩やかな関係を構築するための場、あるいは子育てについて指導を受けるのではなく、対等な関係の中で子育ての悩みやストレスを共有できる場としての子育て支援事業の必要性であった。さまざまな悩みを抱える母親の子育て支援が必要であることは言を俟たないが、悩みのない（あるいは大した悩みはないと思いたい）母親が、気の向いたときに気軽に立ち寄り気分転換をしながら自分の子育てを振り返る場として、いわば特別な支援をしない子育て支援の場として、本学の「にこにこワークショップ」の再構築には必要なのかもしれない。